

潮流

「腐敗した民主政」と「清廉な専制政」はどちらがましか

調査第二部副部長 南 武志

映画やドラマ、アニメーションにはリメイク作品、リブート作品も多い。例えば、東宝特撮映画の代表であるゴジラ作品は、ハリウッド映画を含め、幾度もリメイク、リブートされている。2016年に公開された「シン・ゴジラ」は、東宝ゴジラシリーズとしては29作目であるが、もちろん連続性はなく、突如現れた巨大生物「ゴジラ」が日本に上陸するという初期設定は踏襲しつつも、進化しながら変態を繰り返すゴジラが引き起こす大災害とその対応策を巡る政治ドラマといった側面も強調されていた。なお、総監督を務めた庵野秀明氏といえば、「新世紀エヴァンゲリオン」の監督としても有名であるが、この作品シリーズもまたTV放映版、劇場版、新劇場版と、設定などが異なるストーリー展開がなされていた。

その他、TVドラマであれば「白い巨塔」や「黒革の手帖」などが有名であるし、根強い人気を誇る「機動戦士ガンダム」、「セーラームーン」、そして「宇宙戦艦ヤマト」などのアニメ作品も最近リメイク（もしくはリブート、リビルド）が登場し、話題となった。

閑話休題。田中芳樹氏の長編スペースオペラ『銀河英雄伝説』を原作とするアニメーションもまた、最近リメイクされている（銀河英雄伝説 Die Neue These）。ご存知の方もいるだろうが、銀河帝国（帝国）の軍人ラインハルト・フォン・ローエングラムと自由惑星同盟（同盟）の将校ヤン・ウェンリーらを取り巻く群像劇というスタイルで物語が展開されていくが、「腐敗した民主政」と「清廉な専制政」とどちらが良いのか、という問題が根底に横たわっている。下級貴族の子息だったラインハルトは皇帝に奪われた姉アンネローゼを取り戻し、かつ横暴な門閥貴族が跋扈する社会を変革し、正しい政治を施すべく、皇帝の座の奪取を目指す。一方、星間交易船船長の子として生まれたヤンは、無料で歴史の勉強をするために士官学校に入学するが、戦略論の才が災いとなり、意に反して軍人として昇進していつてしまう。結局、戦略的不利の状況にあった同盟は帝国に降伏、併合されてしまうのだが、その後、ラインハルトもヤンも若くして生涯を終え、物語は閉じる。

繰り返しになるが、独裁者であっても私利私欲に走らず、民衆には正しい政治を施すような体制と、腐敗した政治家が私利私欲のために政治を行う体制、究極の選択であるが、どちらがましであろうか。かのプラトンはソクラテスが処刑されたことから民主政治への疑念を抱き、哲人による政治を提唱したが、それに重なるテーマともいえるだろう。

筆者は、たとえ腐っていても民主政の方がましであり、それは政権を選択できる権利があるから、と考える。その「選択」には相応の責任が発生するため、21世紀の日本に生きる人間であっても、樂をして「正しい政治」を享受できるならそれでいい、と考える人もいるだろう。実際、近年、民主国家であっても、強力なリーダーシップを誇る政治家が登場するケースが見られる。しかし、それは「自分たちは何もしくとも、誰かが何とかしてくれる」という救世主待望論の反映である。独裁者やその後継者がいつまでも清廉潔白である保証はない。先人らが血を流して得た「選択できる権利」はしっかり守っていくのが子孫のためであろう。